

中野春夫 著

『恋のメランコリー——シェイクスピア
喜劇世界のシミュレーション』

「シェイクスピア喜劇 (Shakespearean Comedy)」という言葉から一般に人が連想する世界とは、どういうものだろうか。もちろん個人差はあるとして、この用語を題名に掲げた著作でシェイクスピア喜劇論の一時代を画した Northrop Frye の定義に首肯する向きは、案外多いのかもしれない。それはすなわち、若い男女が艱難辛苦を乗り越えて結ばれるという型であり、恋の成就を阻む障害が混乱を経て解消され、幸福な結婚という喜劇的大団円に向けて収斂するという構造である。実際には、シェイクスピアの喜劇作品にはこの図式には全く当てはまらないものも多いが、それでも『夏の夜の夢』、『お気に召すまま』、『から騒ぎ』、『十二夜』など、映画化されて現代でも人気を博するのは、いわゆるロマンティック・コメディと呼ばれる作品群である。昔も今も、恋と結婚こそがシェイクスピア喜劇の「売り」であることは間違いない。

しかしながら、実はシェイクスピア喜劇の恋人達には、我々現代人にとっては首を捻りたくなる言動も目立つ。そもそも、作品中結婚するカップルが多すぎる。最低二組は当たり前で、三組も四組もどやどやと駆け込み結婚する。中には、到底若いとは言えないカップルがちゃっかり混じっていたりするから、話は余計ややこしい。見た目重視の相手選びも気になるが、やたらと金の話が出てきたり、果ては「ベッドトリック」なる策を弄して強引に結婚にこぎつける、ロマンティックとは言い難い恋も多い。「ああ、人間って、なんて馬鹿なんでしょう！」——恋人達のとんやわんやに大喜びする妖精パックの台詞は、他人の恋愛と結婚ほど不可解で滑稽なものはない、というシェイクスピア喜劇のテーゼを端的に表しており、それはそれで極めて普遍的である。とは言え、執筆から 400 年以上の時を隔てた現代の読者や観客にとって、その恋と結婚は、時にあまりに不可解なことだらけなのである。

では、シェイクスピア時代の観客はシェイクスピア喜劇の何を見て、どう反応したのか。それを再構築するのは無論たやすいことではないが、本書は社会史の知見を導入することによって、この難行に見事成功している。婚姻をめぐる教会法や裁判記録、医学書など、多岐に亘る一次資料が紹介され、当時の結婚観や階層意識、性道徳が実にわかりやすく解き明かされている。

したがって、「[シェイクスピア喜劇の] 分からなくなった部分あるいは分からなくなりつつある部分を想像力で再現してみると、その劇世界のさらなる面白さが見えてくるかもしれない」とあるのは、言うまでもなく著者流の謙遜であって、幅広い歴史史料を渉猟した上での実証性が根幹にある。しかし、こ

の言葉はあながち謙遜だけでもない著者の提言であり、本書の最大の魅力と功績に対する偽りのない自負とも取れる。求愛、結婚、家族といったシェイクスピア喜劇の中心テーマを、当時の風習、法規定、道徳観念や価値観と関連づけて歴史的に論じる手法は、近年のシェイクスピア研究でも大きな成果を挙げってきた。にもかかわらず、こうした研究は、歴史的事実の解明に拘泥する余り、文学作品としての面白さを蚊帳の外に置く本末転倒の結果をもたらしてきた。その点、「シミュレーション」という名のもとに著者が揮う自由闊達な筆致と、想像力を融通無碍に飛翔させる作品及び時代解釈は、そんな野暮とは一切無縁である。それは、著者が依拠する社会史家の選び方にも表れている。シェイクスピア研究者が偏愛する Lawrence Stone が指摘した家父長主義的家族史とは異なり、結婚をめぐる章で援用される David Cressy は、公式見解と慣習のギャップ、宗教改革を経てもなお水面下で保たれる過去との文化的連続性を浮き彫りにする。そのごた混ぜ感は、成程シェイクスピア喜劇の世界に一層相応しい。シェイクスピアの喜劇は面白い、そしてシェイクスピアの時代も面白い——そんな二重の面白さを体感させてくれる好著である。(研究社、2008年11月、四六判 vi + 332 頁、3,600 円)

——竹村はるみ (立命館大学准教授)